産経新聞　第三種郵便物認可

イベント再開 感染者6倍

警戒基準設定 本格検討へ

新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けが5類に移行してから8日で3カ月となる中、一貫して感染者の増加が続いている。今夏は祭りや花火大会などのイベント再開が感染拡大の一因とされ、お盆の帰省などでさらなる感染増も懸念される。厚生労働省は警戒度の目安となる基準の設定に向け、検討を本格化させる。（中村翔樹）

厚労省によると、7月30日までの直近1週間に、全国約5千の定点医療機関から報告された1医療機関当たりの感染者数は、15・91人。5類移行から11週連続の増加となり、移行直後の約6倍に達した。

同省に助言する専門家組織は今月4日の会合で、「より免疫逃避が起こる可能性のある株の割合増加」「夏休みなど接触機会の増加」などを挙げ、今後の見通しを「患者数の増加が継続する可能性がある」と分析した。

現在主流で複数のオミクロン株が組み合わさった「XBB」系統は、従前のBA・5より感染力が高く、ワクチンや自然感染で得た免疫を逃れる性質も強いとされる。

感染者数は、8波ピークの29・80人（参考値）に比べると半分程度。確保病床使用率（7月26日時点）も、50%超の自治体は福岡、宮崎、沖縄の3県にとどまるが、現場は楽観していない。

「いとう王子神谷内科外科クリニック」（東京都北区）では、今月3日までの直近1週間に発熱などの症状で受診した患者のうち、約6割がコロナ陽性。1日当たり6～7人に上り、伊藤博道院長によると、昨夏の7波と同水準だという。

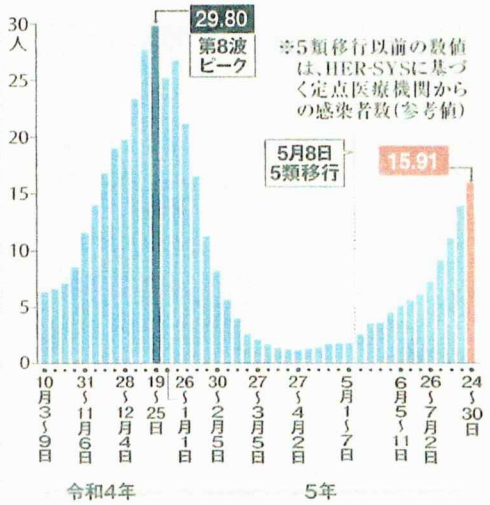
伊藤氏は「感染者は祭りや花火大会など、今夏から久しぶりに復活した行事に参加していたケースが多い」と指摘。盛夏に入り熱中症も増加傾向にあり、「コロナ疑い患者のこれ以上の増加は厳しい」と懸念する。

警戒意識の共有を巡っては、7月下旬以降の専門家会合などで、季節性インフルエンザで使われている「注意報」（1定点当たり10人超）や「警報」（同30人超）の導入を求める意見が繰り返し出ている。

厚労省は「できるだけ早く形を示したい」としているが、コロナの流行に明確な周期性はなく、目安設定の在り方には検討の余地がある。脇田隆字座長は「基礎データがまだ少ない。まずは暫定的なものになるだろう」との見方を示す。

ウィズコロナの夏。高齢者らには依然、リスクが高い感染症であり、同省は「換気や混雑時のマスク着用など、基本的な対策に改めて取り組んでほしい」としている。

コロナ5類移行3カ月



水平垂直

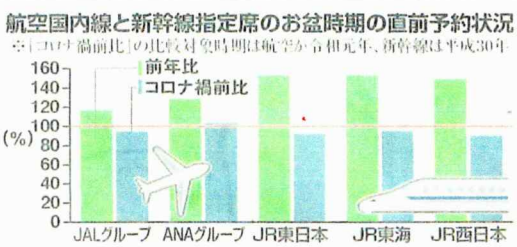
国内旅行回復、海外は鈍く

新型コロナウイルスの5類移行後、旅行を楽しむ人の数は順調なペースで回復している。5類になって初の夏休みシーズンに向け、航空大手の国内線予約数はコロナ禍前を上回るケースが出てきた。一方、日本発の海外旅行は、なおも戻りの鈍さが課題となっている。

「新型コロナの5類移行によって心理的なハードルがなくなった」

「5類移行もあり、長距離利用の伸びなど旅行需要の高まりを感じる」

お盆の予約状況について、航空会社やJRの担当者からは好調ぶりをうかがわせる声が相次ぐ。



全日本空輸によると、10～20日のANAグループの国内線予約は前年比28・7%増加。令和元年比でも3・2%増え、5類移行前となるゴールデンウイーク（GW）や年末年始を含む大型連休で、コロナ禍前を上回るのは初めて。JRグループ全体の新幹線指定席の予約数は、平成30年比で93%まで回復。いずれもピーク時の座席は既に埋まってきているという。

昨年から回復傾向は続いていたが、5類移行が拍車をかけた形だ。

5類移行に合わせて政府は入国時の規制を緩和したこともあり、日本からの海外旅行も伸び始めている。旅行大手のHISによると、6月の海外旅行の売上高は前年同月比で5倍を超えた。ただ、令和元年同月比とな

夏休みシーズンを迎え、混雑する羽田空港＝7日午後（松井英幸撮影）